

# ケータイ小説における女同士の関係

## — 『恋空』 ブームとは何だったのか? —

武内佳代・川原塚瑞穂

### はじめに

2006年から2007年、ケータイ小説が日本の出版業界を賑わせたことは記憶に新しい。トーハンが発表した文芸書年間ベストセラーのリストによれば、2006年には、売上ベストテンのうち4冊をケータイ小説が占め、2007年には、上位3位まで独占、またベストテンのうち半分がケータイ小説だった。出版不況の中、次々とヒットを飛ばしたケータイ小説が文芸業界に与えた衝撃ははかりしれない。

なかでも美嘉『恋空』は、2006年10月に上下巻で単行本化されると、発売部数は販売開始1ヶ月で100万部を超え<sup>1</sup>、累計で200万部突破の大ベストセラーになった<sup>2</sup>。そもそも2005年からのケータイサイト、魔法のiランド<sup>3</sup>での連載でさえ、延べ閲覧者数は2009年までに延べ2400万人を記録したとされる<sup>4</sup>。2007年7月に漫画化<sup>5</sup>、同年11月には映画化<sup>6</sup>されて興行収入39億円という邦画としてはかなりのヒット映画となった<sup>7</sup>。2008年にはテレビドラマ化もされている。そのような大がかりなメディアミックスの中で当時のケータイ小説ブームを牽引した『恋空』は、従来ケータイ小説の代表作と見做されてきた<sup>8</sup>。

ところで、『恋空』をはじめヒットしたケータイ小説はすべて恋愛小説であり、それゆえこれまでケータイ小説が分析される際には、ヒロインと彼女をめぐる男性たちとの関係が焦点化されてきた。しかし若い女性を読者層とするケータイ小説が少女小説の一形態であると考えれば、当然ヒロインと彼女をとりまく女性たち(女友だち)との関係がどのように描かれているかも同等に検討されてよいのではないか。本稿ではそのような視点から、『恋空』と、その前後に連載・出版され人気を博した『天使がくれたもの』(以下『天くれ』)、『赤い糸』シリーズ(『赤い糸』『赤い糸Destiny』)という三つのケータイ小説を比較分析していく。その上で、『恋空』テキストの独自の戦略性についても比較検討し、『恋空』ブームの要因の一端を探ろうと考える。

## 1. ケータイ小説について

### 1-1. ケータイ小説の歴史

最初に大ヒットしたケータイ小説は、Yoshiがケータイの個人サイト上で公開した『Deep Love』<sup>9</sup>である。渋谷で援助交際をする17歳の女子高生が、一つの出会いをきっかけに真実の愛を見つけ出す、AIDSで亡くなってしまうというストーリーだ。女子高生を中心に携帯電話による口コミで人気を広げ、マスコミでも話題となった。2003年から2006年にかけて、文芸書の売上年間トップテン(トーハン調べ)にはYoshiの作品が毎年ランクインし<sup>10</sup>、ケータイ小説=Yoshiともいえる第一期ケータイ小説ブームが起こった。文体、頻出するイベントの内容など、Yoshiがその後のケータイ小説に与えた影響ははかりし

れない。

その後、素人の若い女性が実体験をもとに記した恋愛小説が絶大な人気を博し、次々と出版されベストセラーになるという第二期ケータイ小説ブームが起こった。そのことは、Yoshiという男性作家が、若い女性に取材をして戦略的に執筆やメディア展開を図っていった<sup>11</sup>のとは対照的である。これらの、実体験に基づく作品群は、「リアル系ケータイ小説」<sup>12</sup>とも呼ばれている。

第二期ブームの口火を切ったのは、Chacoが高校時代の体験をもとにした『天くれ』である。魔法のiらんどBOOKランキングで数ヶ月1位を獲得し続け<sup>13</sup>、2005年10月、スターツ出版から発売された。2006年12月には、シリーズ4作で100万部を突破するベストセラーになり<sup>14</sup>、2007年には映画化、漫画化もされている。

最大のヒットとなった美嘉の『恋空』は、読者の圧倒的な支持を受け、サイト上での閲覧数は当時160日間連続ランキング1位を記録した<sup>15</sup>。映画化のほか、2007年には漫画化、2008年にはテレビドラマ化もされている。

続いてヒットしたメイの『赤い糸』も、実話ベースの恋愛物語である。2007年1月にゴマブックスから上下巻で出版されると、発売1週間で100万部を達成した。2008年12月には、映画とドラマが同じキャストで同時公開され、同年から漫画化もされている。

こうして、魔法のiらんど発のケータイ小説が次々と書籍化されベストセラーとなり、さらにメディアミックス戦略を成功させることで、ケータイ小説の黄金期が到来した。

## 1-2. ケータイ小説の読者層

日本で携帯電話を使ってメール送受信やウェブの閲覧ができるようになったのは、1999年2月、NTTドコモのiモードのサービスが始まってからである。これ以降、他社も次々と同様のサービスを開始、各社の携帯電話キャリアに応じた様々なウェブサイトが立ち上げられるようになった。その初期には、各社の携帯電話キャリア専用で作られた課金型のコンテンツ・ビジネスが中心だったものの、2006年にディー・エヌ・エー社がゲームとソーシャル・ネットワーク・サービス（以下SNS）を運用する無料サイト・モバゲータウンを開始して以来、広告収入で運営する無料サイトが激増する。そのような無料サイトの一つとして、やがて魔法のiらんどなどが生み出されることになった。

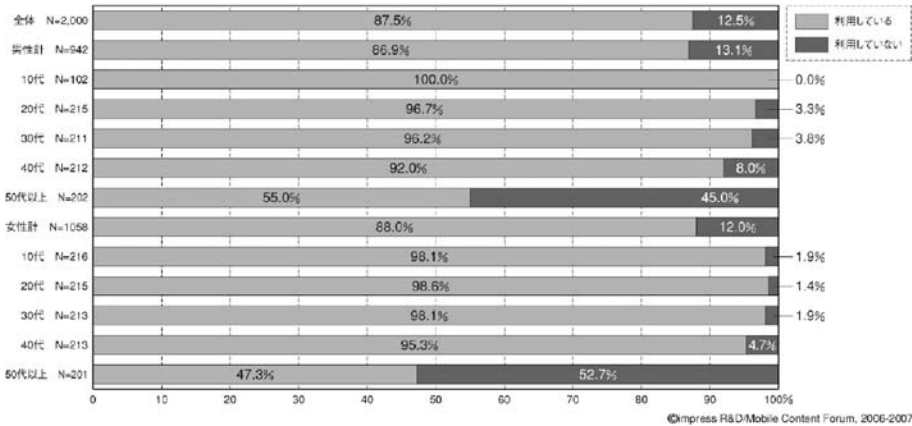
そうした中、2002年ごろから携帯電話によるインターネット使用が急成長し、2005年には携帯電話所持者の87%が使用するに至る<sup>16</sup>。この年、2006年度の総務省の発表によれば、約7086万人、すなわち日本人の半分以上が携帯電話からウェブサイトを開覧するようになっていた<sup>17</sup>。

その意味で、『恋空』の携帯電話用のコミュニティサイトへの登場が2005年12月<sup>18</sup>だったことは象徴的である。つまり『恋空』のブームは、携帯電話のインターネット・サービスの整備だけでなく、読者のモバイル・インターネットに関する意識環境の成熟もまた火付け役となっていたのである。

ところで、これまでに『恋空』の読者層に関する精密な年齢・性別の調査は行われていないが、魔法のiらんど上に掲載された、『恋空』の次作にあたる美嘉『こんべいとう』のアンケート<sup>19</sup>には、読者の年齢層は90%以上が10代20代とあり、『恋空』も同様と考えていい。また、日本のAmazon.comサイトにおいて『恋空』上巻のカスタマーレビューの多くに、「スイーツ（笑）」という男性が女性を揶揄するネット用語が見られる<sup>20</sup>ことから、読者層は女性が中心であると見ていい。

実際、『恋空』がウェブ上でヒットした2006年ごろは、表1からわかるように、10代20代の女性たちの携帯電話によるウェブ利用率は98%以上にまで及んでいる。30代の女性の利用率も同様に高いことを考えれば、『恋空』が話題にのぼった際、その世代も試しに閲覧した可能性も指摘できよう。

表1 情報サービスの利用 [年代別と性別]



### 1-3. ケータイ小説研究史

2008年、すなわち第二期ブームの直後に、ケータイ小説に関する書籍が次々と出版された。稚拙で未熟である、小説ではないとの厳しい批判にさらされながらもなぜ爆発的に売れたのか、ケータイ小説の謎を解く試みがさまざまな方面から行われた。

まず本田透 (2008) は、ケータイ小説のあらましからその特徴までを整理した上で、ケータイ小説に頻出するイベントの一つである「真実の愛」こそが、資本主義が極限まで肥大化し、特に地方に資本主義の停滞が顕著な現代を生きる少女にとって「救済の物語」として機能したと指摘した。

ケータイ小説の地方性を指摘した速水健朗 (2008) は、その文化的背景として浜崎あゆみ、ヤンキー系少女漫画、レディーズ雑誌などを挙げ、脈々と受け継がれてきたヤンキー文化の一端としてケータイ小説を位置づけた。また、近年のヤンキー文化論においても、ケータイ小説への言及は多い<sup>21</sup>。

一方で、少女文化との繋がりを指摘する声もある。例えば、ケータイ小説と『小説ジュニア』掲載の少女小説との類似を指摘した米光一成 (2008) は、ケータイ小説最大の特徴は、それまで大人の編集を経なければならなかった少女のための小説が、少女から少女へと直接届くようになったことだとしている。

また、可愛い装丁のものがよく売れることに注目する杉浦由美子 (2008) は、ケータイ小説の内容はまさに王道の少女漫画の感覚であり、文体は花井愛子<sup>22</sup>の少女小説などと似ていると指摘、ケータイ小説を少女向けライトノベルと位置づけている。

このように、ヤンキー文化、少女文化の一端に位置づけられるケータイ小説を、文学作品としてテキスト分析してみせたのが石原千秋 (2008) である。石原は、ケータイ小説では特に「誤配」が恋の特徴であり、レイプされた少女が自分を「汚い」と感じることや、中途半端な態度が一番責められることなど、様々な特徴がホモソーシャルの構図に組み込まれていると指摘、それが、現実にホモソーシャルな社会を生きて

いる少女を「安心」させ、『恋空』のヒットをもたらしたのだとする。

このように概観すると、これまでのケータイ小説研究において、文学研究の視点が少ないことがまず指摘できる。さらに誤解を恐れずに言えば、いずれの研究も作品の共通点ばかりに注目し、それらの差異に目を向けていない。確かにケータイ小説の見取り図としては有用であるが、数あるケータイ小説の中でも、なぜ『恋空』がブームとなったのか、それを説明するためには、比較論的視点を導入する必要がある。本稿はそれらの視点から分析を行っていく。

## 2. 『天くれ』『恋空』『赤い糸』にみる女性同士の関係

### 2-1. 『天くれ』における「友情小説」との類似性

すでに述べたように、ヒットしたケータイ小説はすべて基本的に恋愛小説である。例えば、『天くれ』は、舞とカグの想いのすれ違いが描かれていく。だが実のところ、舞がカグと直接交流するのは文庫合計226ページ中、約57ページにすぎず、二人は交際すらしていない。後述するように、本作ではむしろ女友だちとの交流のほうが丁寧に描かれている。

他方、『恋空』は病死したヒロとの運命的な恋を美嘉が回想して語る小説であり、『赤い糸』は芽衣が運命の赤い糸で結ばれた相手を見つけるまでの物語である。これらの二作品はどちらも定番イベント<sup>23</sup>によって展開するが、女同士の関係を比較してみると新たな差異が見いだせる。本章では、三作品における女同士の関係の描かれ方について改めて分析し、比較検討を行っていく。

まず『天くれ』は、入学式的美衣子との出会いで始まる。そして美衣子が舞をかばったことがきっかけとなり、「1ヶ月もたたないうちに、2人は周りから同じ中学出身と思われるほどの仲良しに」なる。美衣子の誘いで岸和田の「たまり場」へ出入りするようになった舞は、最初はテルオと交際するが、テルオと美衣子が両思いなのを知って身を引く。

「(略) 美衣子もまだ好きなんやろ？ あたしも、ごめん」 / (略) / 美衣子との間に空いたすき間が、少しずつ埋められていく。 / 2人はその後も長々と話し合った。気づけば、テルオの話題なんか終わって、違う話題で笑い合えるように。 / 自分ばかりがづらいわけじゃなく美衣子もつらかったんやと気づき、やっと舞は現実を受け止めた。(29-30)

確かに、舞にとってテルオとの別れはカグとの出逢いへの助走ではある。しかしそれが「美衣子もつらかったんや」という「気づき」をもたらす点では、美衣子との絆をより深める出来事だとも言えよう。

その後、カグとの距離を縮めていく舞だが、白浜へアルバイトに行ったきりカグが全く連絡を寄越さないことに怒りを覚え、たまり場へ行かなくなる。そのときに、「最近けえんやん。(略) なんかあったん?」、「カグとなんかあった?」などと声をかけてくれるのが美衣子である。だがもうカグのことを思い出したくない「舞は、美衣子を避けるように」なる。舞は、「別に美衣子は何も悪くない、わかっている。 / でも、つらい気持ちをイチイチ聞いてくる彼女がうざくてたまらない」と心の葛藤を続ける。その後、気を遣う美衣子に八つ当たりする舞は、「もう一言も言葉を交わ」さなくなり、彼女がクラスで除け者にされても無視する。そしてそのことで罪悪感を持ちながら高校二年生になった舞は、美衣子が退学し

たのを知り、「あたしのせいや」と後悔し、謝りに行く。

深く頭を下げて、舞は懸命に謝り続けた。／（略）／「だから、舞のせいじゃないねん。それにな、今やっと普通に舞と話せてうれしいねんで。だから、謝るのはなし！」／そう言って、美衣子はっこりとほほ笑んだ。／2人は、半年間のすき間をゆっくりと埋めるように笑い合った。／（略）／舞は、改めて彼女の優しさを胸に感じた。／こんな友達は、簡単にできない。(122-123)

このように、『天くれ』では、美衣子とのすれ違いから和解までが丁寧に綴られている。そして和解したその日、美衣子は、「カグな、たぶん舞のこと好きやで」、「いけるよ、自信持ち！」などと舞を励まし、深夜まで一緒にカグを待つ。それに対し舞は「美衣子がいなきゃ、こうして待つことさえできなかったはず」と感謝する。

その後も、美衣子は舞の恋の行方を何くれとなく見守り続ける。カグを諦めようとする舞を見て「こんな悲しいやんか」と「暗く沈んだ表情を浮かべ」たり、明るく振る舞う舞の「つらい気持ちに、美衣子は強く唇をかん」で同情する。その一方で、舞がカグ似の快に出逢って浮かれたときには、「カグへの気持ちは、その程度やったん？」と「本当に大切に思ってくれているからこそ、美衣子はときに厳しい言葉もかけ」もし、だが舞がカグと快の二人に「思わせぶりな態度してたから罰が当たった」と後悔すると、「涙ぐむ舞をそっと優しく抱きしめ」る。

快と別れた舞を次の恋へと鼓舞するのも美衣子である。美衣子の「逃げてらんと、いいかげん素直になりや」という厳しい言葉を、舞が「素直に受け入れて」「涙があふれ出してくる」と、またもや美衣子は「静かに涙を流す彼女をそっと抱きしめ」る。このように美衣子は、恋する舞を叱咤激励しては、舞が「涙を流す」と「そっと抱きしめ」る重要な存在としてある。

本作では結局交際する前にカグは事故死するが、それから五年後、「カグに会いに行こうと思うねん」と、舞がカグの墓参りを切り出した相手は美衣子である。そして舞が「昔の自分と向き合っていたことをすべて話」すと、美衣子は「うれしそうに旦那のテルオにそのことを話」し、墓参りの準備をはじめ。そのようにしてカグの死後にも二人の友情の厚さは紡がれるのだ。

もちろん美衣子の他にも、舞の恋を励ます女友だちが登場する。例えば、たまり場の幹は、カグの「女なんかいらんねん」という一言でショックを受けた舞を、「カグも、舞の頑張り次第でいくらでも変わる」などと励まし、舞の「元気を取り戻」させたりする。また、同じたまり場の雪奈は、「失恋いやすには、次の恋やって！」という一言で「舞の気持ちを大きく変え」、快との出逢いへと導く。その後、雪奈は快の女癖の悪さから、「こんなこと言いたくないけど、舞がかわいそうや」と別れを勧めてもいる。

舞の中学時代の恋にしても、友だちの純子のサポートがある。例えば、舞が勇心と付き合うことができたのは、「純子と2人でそっと鞆の中に入れたラブレター」のお蔭だ。そして勇心との交際を始めたものの、彼に「純子と2人でドキドキしながら電話」するなど、「付き合いは、とても微妙なもの」に終わっており、そうした交際はむしろ純子との絆を深める儀式のようなものに映る。高校生の舞は勇心と一度よりを戻すが、その際仲介役となった純子は「涙ぐみながら喜」び、また舞の気持ちが揺れているときには、「はっきりしてあげな、勇心も岸和田の彼もあんた以上につらくなるんやで？ 気持ちは出てるんじゃないん？」という、さきの美衣子と同様の厳しい言葉で勇心との別れを決意させる。

ここでは割愛したが、美衣子、幹、雪奈、純子といった女友だちに舞が恋や友情について相談をする挿

話は他にもかなり描かれている。本作においてカグとの恋愛の記述が少ないことはすでに述べたが、以上のように見てくると、女友だちとの交流が特に重視されていることがわかる。その意味で言えば、『天くれ』は、恋愛小説というばかりでなく、初期少女小説によく見られた、女同士の絆を描く「友情小説」<sup>24</sup>というジャンルにも近いと言える。『恋空』や『赤い糸』と違い、運命の恋人と困難を乗り越えたり、交際したりすることなく終わる結末は、余計にその色合いを濃くしよう。

## 2-2. 『恋空』と『赤い糸』——恋か？友情か？

『天くれ』だけでなく『赤い糸』においても、時にすれ違うことはあっても主人公を支え続ける女友だちが存在する。しかし『恋空』にはそのような存在がない。主人公美嘉の友人は時とともに入れ替わり、唯一はじめから終わりまで登場するアヤにしても、親密性は薄いと言わざるを得ない。なぜならば、『恋空』の友情は驚くほど恋愛に左右されているからだ。その様相をまずは美嘉とアヤの関係に見ていこう。表2に、美嘉とアヤの関係を時系列順にまとめてみた。

表2 時系列順に見る美嘉とアヤの関係

関係	美嘉とアヤをめぐる出来事
親密	新学期、美嘉とアヤは出会った途端に仲良くなる。
疎遠	ノゾムを好きなアヤが、美嘉とノゾムの仲を疑ったことで二人は疎遠になる。
親密	誤解が解け仲直りする。さらに、同時に恋人ができることで二人の絆は強まる。
疎遠	ノゾムが美嘉に告白しているのを目撃したアヤは、美嘉を無視するようになる。
親密	ノゾムの告白を美嘉が断ったと知ったアヤの謝罪により仲直りする。また二人同時に恋人ができる。
疎遠	自分の恋愛が思うようにならないアヤが、幸せそうな美嘉とその恋人を別れさせようと画策する。
親密	美嘉はそれを知っても特に怒らず、二人の友人関係は続く。
疎遠	美嘉が自分と恋人を別れさせようとしているとアヤが誤解し、二人は大喧嘩する。
親密	アヤの誤解は解け、お互いに謝罪し仲直りする。
疎遠	恋人と別れヒロと復縁した美嘉を、アヤは「軽い女」だと責め、喧嘩別れする。
疎遠	ヒロの葬儀に現れたアヤが謝罪するが、美嘉は話も聞かず走り出す。

この流れを見ただけでも、美嘉とアヤの友情が、常に男関係に左右されていることがわかるだろう。とはいえ、美嘉には何の責任もない。「あの子は男のためなら友情を裏切るタイプだね、絶対！」と言われてるように、疑い、嫉妬し、裏切るのはいつでもアヤである。そんなアヤと友だちづきあいはするものの、美嘉はいつでも一線を引いて、心を完全に許すことはない。何かあるごとに、「アヤは恋愛がからむと変わる子だから何も起きないといいけど…」と不安に思っているのである。

恋愛がからむことで敵対するのはもちろんアヤだけではない。美嘉は何人もの女たちから嫌がらせを受けるのだが、それらすべての原因は美嘉とヒロの恋である。まず、美嘉へのレイプを指示し、自殺未遂にまで追い込み、流産させた咲は、ヒロの元恋人である。そして、靴やジャージを隠し、教科書を破り、陰口をたたくハルナは、ヒロが学校から追い出したタツヤに好意を寄せていたために、ヒロの恋人である美嘉を逆恨みしていた。また、ヒロが美嘉と別れた後に交際したサリナ、ミヤビも美嘉に対して執拗な嫌が

らせをしている。そうした、ヒロの恋人であるがゆえに美嘉に降りかかる数々の災難は、それに耐えてヒロへの愛を貫く美嘉の恋をこの上なく貴いものとして昇華していく。

そのような『恋空』では、当然友だちよりも恋人の大切さが強調されることになる。例えば、次のような場面に顕著である。

ねえ、ヒロ。／ヒロと別れてからね、いろんな人とたくさん遊んだ。／携帯電話の電話帳を開くと、この三ヶ月間で電話帳に登録されたのは100人以上もいるんだよ。／でもね、こんなに友達がいても全然ダメなの。／ヒロが…ヒロがいてくれなきゃ…ダメなんだよ。／心のすき間を埋めてくれるのは、100人の友達よりたった一人の愛しい人だったんだ。(上210)

ヒロと別れた「心のすき間」を友だちでは埋められないと気づいた美嘉は、この後、電話帳から友人のデータを一件一件消していく。「100人の友達よりたった一人の愛しい人」、まさにこれが『恋空』を支配する価値観なのである。

だが、美嘉が心から信頼する友だちがいないわけではない。アヤとミヤビに無視され孤独になった美嘉に優しく声をかけたのが、ヤマトとイズミとシントロウの三人である。

今まで、恋のせいで人が変わってしまった姿を何人も見てきた。／ヒロの元カノも、アヤも…そうだったな。／友達なんて…仲間なんてガラスのようにもろく、触れたらすぐに壊れてしまうはかないものだと思っていた。／だけど、今はこの三人の友情が壊れる事はないって信じられる。／これが永遠に変わる事のない本当の“仲間”なんだね。(上237)

美嘉はようやく信頼できる「仲間」を見つけたと喜ぶ。もっとも、ヤマトは一度、恋人と別れた美嘉を責めて離れていってしまうので、イズミとシントロウこそ、何があっても美嘉を裏切らない「仲間」として描かれたと言えるだろう。だが、ここで注意しておきたいことがある。イズミとシントロウは恋人同士なのだが、くりかえし美嘉の親として、夫婦として語られているのだ。例えば次のような描写である。

過保護ぶりを発揮するイズミとシントロウを見て、ヤマトはあきれた顔をした。／「なんかおまえらって美嘉の親みたいだな！」／「あはっ!! じゃあイズミとシントロウは夫婦だね♪」(上231)

イズミとシントロウは、役割としては美嘉の理解ある両親であり、過保護で常に優しく包み込む存在なのである。つまり、『恋空』で唯一味方であり続けるのは、「友だち」というより「保護者」であり、それは彼らが恋敵になり得ないことを意味する。「恋愛」と「友情」がからんだ時、必ず「恋愛」が優先されてしまうから「友情」は信用ならない。けれども、決して自らの「恋愛」にかかわることのない存在がいたら、そこに初めて「友情」が可能になるのだ。

それに対して『赤い糸』は、同じような定番イベントで展開する恋愛小説であるにもかかわらず、友情が優先される場面が数々登場する。例えば、たかチャン（高橋くん）をめぐる騒動の中で、芽衣の首を絞め、自殺未遂を起こして記憶を失った沙良の日記からわかったのは、「アタシは高橋くんより芽衣が大切」「レズじゃないけど、芽衣が大好きだよ！」という熱い思いだった。

「沙良は、ホント芽衣が好きだったんだね。好きな男より、イジメられてた毎日から救ってくれて仲良くしてくれた友達が大事かぁ……わかる気がするね」(下81)

この後、沙良が記憶を取り戻し芽衣と本当の仲直りをする事で、二人の絆はさらに確かなものとなる。また、次に挙げるのは、たかチャンの束縛が強くなり、暴力をふるわれるようになっていた頃の一場面である。毎日放課後に迎えにくるたかチャンと、「会いたい」とメールしてきた親友の優梨との間で芽衣は板挟みになる。

〈放課後、会いたい。無理?〉／優梨から短いメールが入っていた。／優梨は、たかチャンの束縛も放課後に会ってることも知っている。／優梨が頼むんだから、きっと何かあったに違いない。／——だけど、今日も放課後、たかチャンが駅に迎えに来るだろう。／どうしよう……。／——ふと、GW初日を思い出した。／たかチャンの約束より、優梨と美亜を優先したアタシ。／たかチャンを傷つけ、嘘をつかせてしまった。／頭の中で、友情と彼氏が葛藤する——(下209)

以前友情を優先して恋人を傷つけてしまったことを後悔していた芽衣は、一度は優梨の誘いを断ろうとする。しかし、その後泣きながら電話してきた優梨を見放すことなどではしなかった。芽衣は心の中で「たかチャン、ごめん!!」と謝りながら、バッグをつかんで優梨のもとへ走り出す。暴力をふるう恋人への愛と恐れはあるものの、最終的に芽衣は女同士の友情を優先するのだ。もう一つ挙げておこう。薬物中毒になってしまった親友の美亜を救うため、恋人に会うことを我慢する芽衣の姿が描かれている場面だ。

翌日から、アタシは毎日美亜と会った。／学校が終わるとふたりでカウンセリングに通い、お茶をして別れる。／——美亜が立ち直って、クスリから離れていくことが嬉しかった。／アタシがそばにいて美亜が普通の生活をできるなら一緒にいたい。／そう思い、美亜のために時間を割いた。／アックンからは、毎日のように連絡がきている。／休日も放課後も会いたい……。／何度言われたか、わからなかった。／だけど——／今のアタシには、アックンよりも美亜と過ごす時間が大切。／今は美亜といたかった。(Destiny下184)

以上のように、『赤い糸』が描き出す女同士の絆は非常に固く、友情は何にも代え難いものとして、時に恋愛よりも優先されるほど大切にされている。「友情小説」に近い『天くれ』、女同士の絆が大切にされる『赤い糸』と比較してみると、『恋空』がいかにも「恋愛」に比重を置いた、恋愛至上主義小説だったのが明確になるだろう。

### 3. 『恋空』の戦略

#### 3-1. 「リアル」な打ち明け話——作者と読者の絆

レイプや薬物中毒といった定番バントの急展開は、あまりに不自然で荒唐無稽すぎる。にもかかわらず、10代を中心とした女性読者がそうした物語展開に強く惹きつけられた理由について佐々木俊尚は、彼女た



ちがそれらの事件を「本当にありそうだ」という「リアル」を感じたからだと指摘する<sup>25</sup>。だが、たとえ一つ一つの事件にリアリティーがあったとしても、それらが立て続けに起これば、いくら若年層の読者でも不自然にしか映らないはずだ。

実は、『恋空』のようなヒットしたケータイ小説は、そうしたリアリティーを補強する戦略がとられている。それはヒロインを襲う様々な事件を、小説の「リアリティー」としてではなく、実話テイストという「リアル」として読者に届ける戦略である。

三作品でその戦略の在り方を比べてみよう。

まず『天くれ』では、作者が単行本あとがきで、本作が「私の経験談であり、(略)『書き終えたら、彼に逢いに行こう』／そう決意して、ホームページに書き始め」<sup>26</sup>たとしており、物語はそれを事実化するような結末になっている。カグの死から五年後、ヒロインは友だちにこう連絡している。

「カグに会いに行こうと思うねん」／(略)／舞はこの数ヶ月、過去を振り返り、HPを通して周りに公表しながら昔の自分と向き合っていたことをすべて話した。／書き終えたら会いに行こう、と決心していたことも。(220)

カグとの思い出をHPに綴ることで自分の過去と向き合う行為、当然それは作者のChacoが『天くれ』を綴った「経験」と重なる。そうした真実味を裏打ちするように、単行本の最後のほうのページでは「実話をもとにしたフィクション」と明記され、宣伝の惹句にも「実話小説」<sup>27</sup>「実話携帯小説」<sup>28</sup>などがある。このように『天くれ』では、外部のパラテキストによって実話というリアルを読者に提供しようとする。

そのような第二期ケータイ小説特有の戦略について、石原千秋は次のようにまとめる。「ケータイ小説は、それが「現実(リアル)」であるというメッセージを読者に送っている。(略)極端に言えばこうなるだろう。「リアリティーはないが、リアルではある」と」<sup>29</sup>。つまり第二期ケータイ小説において出来事の不自然さにもかかわらず、それが読者に自然なものと映るのは、出来事そのものがリアリティーを持つというよりも実話テイストという戦略に拠っているからなのである。読者たちは、次から次へとヒロインを襲う事件がいかに荒唐無稽であっても、それらを事実として捉え、小説世界に浸ることができるのだ。

ここでは、さらに重要なこととして、他の二作を比べて『恋空』がリアルをより強力に打ち出すことに注目してみたい。

例えば『恋空』は、発表当初からサイトのトップページに「実話」と明記されるという戦略がとられていた。これはのちに「実話をもとに」という表現に改められ、単行本にも「実話をもとにしたフィクション」<sup>30</sup>とあるものの、下巻の作者のあとがきでは次のように事実性が強調される。

ヒロとの約束…これは私が『恋空』を書き始めた理由の一つです。／ヒロがまだ入院生活を送っていた頃に、一つの約束を交わしました。／(略)／HPに赤ちゃんのその後についての応援や質問をたくさんいただきました。／物語のラストで、私に授けられた小さな命…。／(略)／ヒロのいる天国に逝ってしまいました。(下360-363)

パラテキストによって本文をリアル化する戦略はすでに『天くれ』にも見られたが、このような作者自身の詳細な語りによる物語の事実化はかなり周到なものと言える。さらに『恋空』では作者のペンネーム

とヒロインの名前が同じ「美嘉」であり、物語が余計真実味を帯びる。一方、『天くれ』では、実話であることが強調されるものの、ペンネームは「Chaco」、ヒロインの名前は「舞」と区別されており、その意味では現実と虚構とが腑分けされている。また『赤い糸』では、それらの名前は「メイ」／「芽衣」という具合に表記を変えており、また、確かにサイトには、「アタシの体験や友だちの体験などを混ぜ合わせて作ったフィクション小説」と明記されたが<sup>31</sup>、単行本では「この物語はフィクションです」と改められている。

また語りの構造も作品ごとに違いがある。『天くれ』は三人称の語りであり、舞に内焦点化しつつもたびたび舞を「彼女」と表現する。『赤い糸』は基本的には「アタシ」という芽衣の一人称の語りだが、芽衣の視点を離れる箇所が見られる。例えば、上巻では、視点がアックんに替わり、一人称「オレ」の語りになる部分があり<sup>32</sup>、Destiny上巻では、芽衣の視点が及ばぬところで麻美とたかチャンのやりとりが語られたり<sup>33</sup>、視点人物が美亜になったりする<sup>34</sup>。一方、『恋空』は一貫して美嘉に内焦点化し、ほぼ一人称とも言っている自称としての「美嘉」の語りによって成り立っている。したがって読者は『恋空』を、終始美嘉のプライベートな経験談として読むことができるのである。

このように比較してみると、いかに『恋空』が物語を作者の実体験に基づいたリアルであるように見せようとしているか、その戦略性が明らかとなるだろう。そして第二期ケータイ小説においてリアルのカコそが読者を物語に没入させる一要因になっていたとすれば、なかでも『恋空』が読者を惹きつけることになったのは頷ける。

ところで草野亜紀夫は、読者層の女性たちにとってケータイ小説を読むことがメール・コミュニケーションに近いことを指摘している<sup>35</sup>。実際、『天くれ』や『恋空』がウェブ上でヒットした2005年から2006年にかけての携帯電話でのメールのやりとりの相手は、圧倒的に友だちが多い<sup>36</sup>。「リアル」の戦略は、携帯電話という発表媒体があって効果的に機能したことになる。そうだとすれば、携帯電話で読んだ女性読者たちにとって、第二期ケータイ小説の中でより事実性を打ち出した『恋空』は、実話テイストの〈小説〉というよりも、むしろ友だちからの〈打ち明け話〉のように捉えられたと考えられる。なるほど、「美嘉」をはじめ、「Chaco」「メイ」といったペンネームは、まるで友だちの愛称のようであり、メール友だちのような親近感をもたらしたことだろう。

もちろん携帯電話のウェブ環境を考えれば、『恋空』のブームは、メール・コミュニケーションばかりではなく、ブログやSNSといったネット感覚に支えられていた可能性も指摘できる。

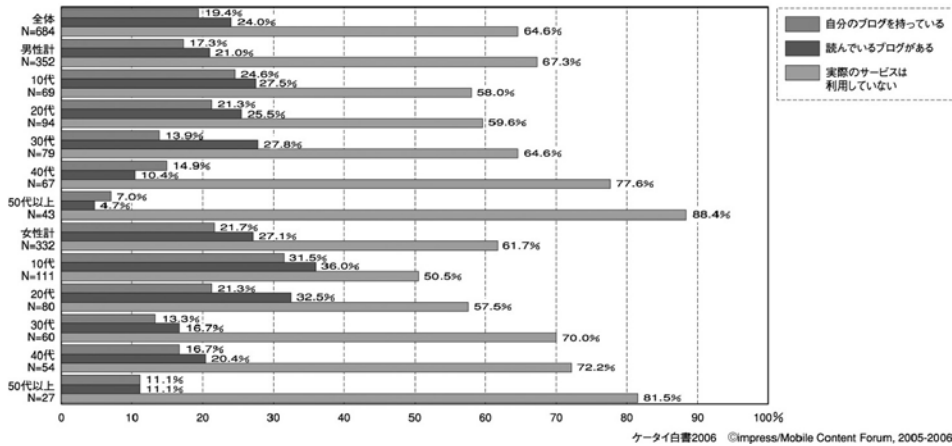
表3に示した2005年から2006年にかけての携帯電話によるブログの利用状況の調査にあるように、当時10代の女性の30%以上が自分のブログを持っており、36%がブログを読んでいるとしている。20代の女性もまた、それぞれ21.3%、32.5%という比較的高い率を示しており、特にブログを読むという行為で言えば、ともに同世代の男性を大きく上回っている。

加えて携帯電話によるSNSの利用状況の調査によれば、当時ミクシィなどのSNSへの参加率は、10代20代の女性ともに44.4%<sup>37</sup>、すなわち携帯を持つ半分近くの若い世代の女性たちが参加していたことがわかる。

このようなメール、ブログ、SNSの利用状況から見えてくるのは、『恋空』がウェブ上で人気を博した当時、読者層の女性たちが携帯電話によって積極的に友だちと繋がろうとしていたということである。そうだとすれば、三作品のうちより真実味を打ち出した、いわば美嘉の打ち明け話としての『恋空』が、彼女たちの繋がりたい願望を最も叶えるテキストだったとも言い換えられる。加えて『恋空』では二作品に

比べてヒロインが女友だちに悩みを打ち明ける場面が極端に少ないが、そのようなプロットもまた、読者を美嘉の打ち明け話に耳を傾ける女友だちの立場に置く余白として機能しているととらえ直せる。その意味で、『天くれ』『赤い糸』が作中で女同士の関係を密にするのに対し、『恋空』では、筆者／ヒロインと女性読者という別の女同士の絆が形成されていると言える。

表3 携帯電話によるブログの利用状況（複数回答）〔年代別と性別〕



### 3-2. 『恋空』の「とっくに決まってる」世界—恋愛の単線性

『恋空』のクライマックスの一つに、美嘉が新しい恋人の優と、闘病中のヒロとのどちらを選ぶべきか迷い、プレイヤーから流れてきた浜崎あゆみの「Who…」という歌を聴いて漸くヒロを選ぶ結論にいたるという挿話がある。そのときのことを美嘉は、偶然に耳に入ったその歌詞こそが「最後の決断をくれた」と語っているが、実際は、この歌はすでにヒロが好きな歌として登場しており、美嘉は高二のときに学園祭で歌っている。つまり、さきの挿話で美嘉は、何かのきっかけでヒロを選んだというよりも、実際は最初からヒロを選ぶことを決めていて、歌詞は彼との思い出を鮮明化する道具にすぎなかったと捉え直せるのである。

このように『恋空』では、美嘉の恋人がすでにヒロに「決まっている」ことが定型化されている。例えば、最初にヒロに交際を迫られた際にはこうある。

「俺マジで別れた。信用してもらえよう頑張っから。俺、美嘉が好きだ。…付き合っほしい」／返事は決まってる。／考えなくても…とっくに決まってるんだ。／「…うん」（上40、下線部は引用者、以下同様。）

また、ヒロがなぜ突然別れを言い出したのかをめぐる真実について、ノゾムから聞か聞かないか決断を迫られた際にも美嘉はこう思っている。

「聞いたら美嘉の人生変わるかもしれねーよ？」／でも、聞かなかつたら一生心の奥に引っかかって

しまうかもしれない。／（略）／答えはとっくに決まってる。／…聞かなきゃ。（下171-172）

さらに、美嘉とヒロの恋愛の最大のクライマックスとも言える結婚の宣誓の際にも、美嘉は次のように自らの想いを表現している。

「え～桜井弘樹さん。あなたは田原美嘉さんを一生愛していく事を誓いますか～？」

ヒロの顔を見ると、下を向いて照れくさそうな顔をしている。／「誓います」／「じゃあ～田原美嘉さん。あなたは桜井弘樹さんを一生愛していく事を誓いますか？」／その答え。／その答えは決まっている。迷いはない。／「…誓います!!」（下252）

このような美嘉のすでに「決まっている」愛のベクトルを運命論的に捉えるならば、それはより感動的なものに映る。だが美嘉の盲信的な愛と捉え直せば、あまりに単線的で荒唐無稽なものでしかない。恋人同士の恋愛世界の切なさに関わりたいならば、前者のように捉える「良き」読者であればいいし、逆に恋愛の理由や複雑なプロセスといったいわば小説的なリアリティを重視するならば、後者のように捉える「悪しき」読者となるだろう。その意味で『恋空』ブームは、美嘉と運命論を共有する多数の「良き」読者が欲望した、「二人の愛さえあれば何もいらぬ」という自閉的な恋愛至上主義の在り方を顕在化させていると言える。

## おわりに

以上のように他の二作品に比べ、『恋空』は、作品の内部から女同士の親密な関係を排除し、また、ヒロインの葛藤の少ない心理描出によって、より端的な形の恋愛至上主義的なストーリーを織り上げた。このような『恋空』の戦略は、比較論的、文学論的視点の導入によってはじめて明らかにされるものにほかならない。他作品についても、今後の個別研究が期待されよう。

最後に、近年の韓国ドラマ『冬のソナタ』<sup>38</sup>、小説『世界の中心で、愛をさけぶ』<sup>39</sup>などによって牽引された「純愛」ブーム<sup>40</sup>との関連についても指摘しておきたい。トーハンの文芸部門年間ベストセラー・リストによると、2003年（表4）には、1位に『世界の中心で、愛をさけぶ』、3位に『Deep Love』、7位に『冬のソナタ』がランクインしている。続く2004年（表5）には、1位に『世界の中心で、愛をさけぶ』、5位に『冬のソナタ』、6位に『Deep Love』がランクインしている。つまり、『恋空』が登場する直前に、「純愛」ブームと第一期ケータイ小説ブームがほぼ同時に起こっていたのである。

『恋空』は、定番イベントなど、Yoshiの生み出したケータイ小説の定型をふまえ、『天くれ』にも見られた著者と読者との距離の近さをさらに強固な絆としながら、そこに『世界の中心で、愛をさけぶ』のような切ない純愛の世界を構築してみせた。このように、『恋空』はケータイ小説独特のイベントやリアル戦略を用いながらも、とりわけ恋愛至上主義によって時代の潮流と見事に寄りそっていた。それにより女子中高生にとどまらない広範の人気を獲得し、一大ブームとなったのではないだろうか。そう考えると、『恋空』ブームをこれまでのようにケータイ小説史や同時代のメディア・文化環境からだけとらえることは不可能であり、今後はさらに現代文学史の文脈においても捉え直さなければならないだろう。

表4 2003年文芸書年間ベストセラー（トーハン調べ）

	書名	著者	出版社
1	世界の中心で、愛を叫ぶ	片山恭一	小学館
2	半落ち	横山秀夫	講談社
3	Deep Love 1, 2, 3, 特別版	Yoshi	スターツ出版
4	キャッチャー・イン・ザ・ライ	J.D.サリンジャー 村上春樹訳	白水社
5	13ヵ月と13週と13日と満月の夜	アレックス・シアラー 金原瑞人訳	求龍堂
6	ブレイブ・ストーリー（上・下）	宮部みゆき	角川書店
7	冬のソナタ（上・下）	キム・ウニ ユン・ウンギョン 宮本尚寛訳	NHK出版
8	よく見る夢（上・下）	シドニイ・シェルダン 天馬龍行訳	アカデミー出版
9	誰か	宮部みゆき	実業之日本社
10	エ・アロール	渡辺淳一	角川書店

表5 2004年文芸書年間ベストセラー（トーハン調べ）

	書名	著者	出版社
1	世界の中心で、愛を叫ぶ	片山恭一	小学館
2	蹴りたい背中	綿矢りさ	河出書房新社
3	いま、会いにゆきます	市川拓司	小学館
4	蛇にピアス	金原ひとみ	集英社
5	冬のソナタ（上・下）	キム・ウニ ユン・ウンギョン 宮本尚寛訳	NHK出版
6	Deep Love 1, 2, 3, 特別版	Yoshi	スターツ出版
7	ダ・ヴィンチ・コード（上・下）	ダン・ブラウン 越前敏弥訳	角川書店
8	アフターダーク	村上春樹	講談社
9	博士の愛した数式	小川洋子	新潮社
10	インストール	綿矢りさ	河出書房新社

## 注

- 1 吉田2008、p.3
- 2 「[恋空] オフィシャルサイト 魔法のiらんど」 (<http://koizora.jp/pub.html>)
- 3 PCおよび携帯電話向けの無料ホームページ作成サイト。2000年3月に、携帯電話から誰でも簡単に小説を配信できる「BOOK機能」が追加され、10代を中心とする若い女性たちが次々と小説を執筆、配信、閲覧していった。
- 4 注2前掲
- 5 羽田伊吹作画（双葉社、2007年7月～12月）

- 6 配給は東宝、監督は今井夏木。
- 7 一般社団法人日本映画製作者連盟がウェブ公開している「過去興行収入上位作品」(<http://www.eiren.org/toukei/2007.html>) より。2007年上映の邦画の中では6位にランクインしている。
- 8 速水2008、p.17
- 9 2000年10月から個人サイト「ザブン」でアップを開始したケータイ小説。自費出版し、ネット販売したところ、10万部売れたという。その後、スターツ出版から2002年12月に『Deep Love 第一部 アユの物語』が出版され、シリーズ計4冊で、270万部を超える大ヒットとなった。また、自らが監督となり映画化もしている。(本田2008)
- 10 『Deep Love』第一部、第二部、第三部、特別版の他、『もっと、生きたい…』(2004)、『恋バナ』(青・赤)(2005)、『翼の折れた天使たち』(空・海)(2006)がランクインしている。
- 11 本田2008、pp.31-45
- 12 本田2008、p.57
- 13 吉田2008、p.49
- 14 「「天使がくれたもの」応援サイト 天くれ倶楽部 魔法のいらんど」(<http://ip.tosp.co.jp/Promo/tenshi.asp>)
- 15 注2前掲
- 16 『ケータイ白書2007』(2006)の調査「資料1-6-1」より。
- 17 吉田2008を参考にした。
- 18 注2前掲
- 19 「『こんべいとう』リアルタイムアンケート 魔法のいらんど」([http://ip.tosp.co.jp/p.asp?I=KONPEITOU5\\_1&SPA=2](http://ip.tosp.co.jp/p.asp?I=KONPEITOU5_1&SPA=2))
- 20 「Amazon.co.jpのカスタマーレビュー 恋空〈上〉一切ナイ恋物語」([http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4883810453/ref=dp\\_top\\_cm\\_cr\\_acr\\_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1](http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4883810453/ref=dp_top_cm_cr_acr_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1))
- 21 五十嵐2009、難波2009など。
- 22 少女小説家。「短期間に著書約200冊、総売上二千万部を達成したことから、〈少女小説界の女王〉と評される。」(内海2006)
- 23 本田2008は、援助交際、レイプ、妊娠、薬物、不治の病、自殺、真実の愛を「七つの大罪」とまとめ、定番イベントとみなしている(pp.12-18)。
- 24 今田2007、pp.189-223
- 25 佐々木2007
- 26 『天くれ』(2009) p.227
- 27 文庫版『天くれ』(2009)の最終ページに置かれた宣伝より。
- 28 『恋空』上(2006)の最終ページに置かれた宣伝より。
- 29 石原2008、p.38
- 30 『恋空』上(2006)、p.348
- 31 本田2008、p.141
- 32 『赤い糸』上(2007) pp.96-103
- 33 『赤い糸destiny』上(2007) pp.150-153

- 34 『赤い糸destiny』上 (2007) pp.193-194
- 35 吉田2008、p.75からの再引用。
- 36 『ケータイ白書2007』(2006)に掲載された調査結果「資料1-5-6」によれば、メールをやりとりする相手の70%以上が友人であり、二位の親子間の約30%以上を大きく引き離している。
- 37 『ケータイ白書2006』(2005)に掲載された調査結果「資料1-8-7」参照。
- 38 2002年に韓国KBSで放送されたテレビドラマ。日本では2003年に放送され、韓流ブームの火付け役となった。
- 39 2001年4月に小学館から刊行された片山恭一の恋愛小説。2004年公開の映画も大ヒットし、300万部を超える大ベストセラーとなった。
- 40 「純愛」ブームについては、小林2005を参考にした。

### 参考文献

- 小林竜雄 (2005.11) 『韓流、純愛、初恋病。』中央公論新社
- モバイル・コンテンツ・フォーラム (2005.12) 『ケータイ白書2006』インプレスネットビジネスカンパニー
- 内海紀子 (2006.1) 『花井愛子』『日本女性文学大事典』日本図書センター、pp.239-240.
- モバイル・コンテンツ・フォーラム (2006.12) 『ケータイ白書2007』インプレスR&D
- 今田絵里香 (2007.2) 『「少女」の社会史』勁草書房
- 魔法の図書館監修 (2007.7) 『このケータイ小説がすごい』ゴマブックス
- 佐々木俊尚 (2007.12) 「ソーシャルメディアとしてのケータイ小説」(ジャーナリストの視点 - CNET Japan) [http://japan.cnet.com/blog/sasaki/2007/12/20/entry\\_25003250/](http://japan.cnet.com/blog/sasaki/2007/12/20/entry_25003250/)
- 中村航・鈴木謙介・草野亜紀夫 (2008.1) 「鼎談 ケータイ小説は「作家」を殺すか」『文學界』62(1), pp.190-208.
- 本田透 (2008.2) 『なぜケータイ小説は売れるのか』ソフトバンク新書
- 吉田悟美一 (2008.2) 『ケータイ小説がウケる理由』マイコミ新書
- 学燈社編 (2008.4) 『国文学 解釈と教材の研究 (特集 ケータイ世界)』53(5).
- 米光一成 (2008.4) 「ケータイ小説の新しさと古くささ」『国文学解釈と教材の研究』53(5), pp.22-29.
- 伊東寿朗 (2008.5) 『ケータイ小説活字革命論』角川SSC新書
- 杉浦由美子 (2008.5) 『ケータイ小説のリアル』中公新書ラクレ
- 藤川大祐 (2008.5) 『ケータイ世界の子どもたち』講談社現代新書
- 石原千秋 (2008.6) 『ケータイ小説は文学か』ちくまプリマー新書
- 速水健朗 (2008.6) 『ケータイ小説的。』原書房
- 宇野常寛 (2008.7) 『ゼロ年代の想像力』早川書房
- 濱野智史 (2008.10) 『アーキテクチャの生態系』NTT出版
- 五十嵐太郎編著 (2009.3) 『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
- 難波功士 (2009.4) 『ヤンキー進化論』光文社新書

※本文中の引用は、下記の書籍を使用した。

Chaco (2009.6) 『天使がくれたもの』ケータイ小説文庫 (スターツ出版)

美嘉 (2006.10) 『恋空』 上下、スターツ出版

メイ (2007.2) 『赤い糸』 上下、ゴマブックス

メイ (2007.6) 『赤い糸destiny』 上下、ゴマブックス